五、品川と伊豆の長八

東品川二丁目にある寄木神社本殿の扉には、右側に猿田彦命、左側には天照大御神と天鈿女命のこて絵（石灰、ふのり、苦汁などを練った漆喰を塗った上に、景色や人物を描いた絵）が描かれています。

また、北品川一丁目の善福寺本堂の正面の欄間と左右の壁や梁には、龍、唐獅子、菊花などのこて絵が残されています。どちらも江戸時代に活躍した名工伊豆の長八の作品です。

長八は、文化十二年（一八一五）に伊豆の松崎（静岡県松崎町）の農家に生まれました。松崎は、伊豆半島の西南部にある港町で、四季を通じて草花が咲き、作物がよく育つ暖かい所です。

長八が子どもの頃の松崎の家いえの屋根瓦は、冬になると強い西風が吹き荒れるため、漆喰で固められていました。そのため松崎では、左官業が発達し、その技術も大変進んでいました。

長八も十二歳の頃から、近くの左官屋に奉公にでました。当時から器用だった長八は、村の娘たちの髪を結ってあげたり、子どもたちに凧の絵を描いてあげたりしていたそうです。また、浄感寺の正観上人に大変可愛がられ、読み書きや絵の描き方などを教わっていました。

絵の勉強のために、長八が江戸にやって来たのは、天保四年（一八三三）十八歳の時です。始めは本所（墨田区）にあった左官屋の親方の家に住み込んで仕事に打ち込み、そのかたわら、谷文晁の高弟の喜多武清の門下に入って、絵の勉強に励み、漆喰彫刻に彩色するという技術は、このころ身につけたようです。

天保十二年、日本橋茅場町にあった薬師堂のこて絵を完成させると、その作品のすばらしいできばえから長八の名は江戸中に広がりました。長八が、江戸へ来てから八年目の二十六歳の頃のことです。ところが江戸の左官職人たちは、田舎出の若い長八の技量をねたみよく思わず、長八は、闇討ちにも会ったそうです。長八の人気の高さがよくわかる事件です。

長八は、その後も、成田山新勝寺（千葉県成田市）の不動明王をはじめ、郷里の松崎などにも多くの優れた作品を作り続けました。

長八と品川との関わりは、明治三年（一八七〇）に長八の妻おきんが急病で亡くなり、その後妻として、品川宿で芸者をしていたお花を迎えたことによると伝えられています。

明治十年の第一回内国勧業博覧会で、長八は、彫刻家高村光雲、今戸弁司らとともに、内務大臣大久保利通から表彰を受けました。近代日本を代表する彫刻家高村光雲は、長八のことを「江戸の左官として前後に比類の無い名人だった。浅草の展覧会で、長八の魚づくしの図の衝立があったことを覚えている。図取りといい、こて先の働きといい、巧みなもので、私は、ここでいかにも名人であることを知った。」と、長八のこて絵を褒めたたえています。長八はこの受賞から十二年後の明治二十二年（一八八九）に深川（江東区）で七十五歳の生涯を閉じました。

長八の残した作品は、品川区内でも寄木神社や善福寺のほかに、袖ヶ崎神社、北品川松葉楼、相模楼などにありましたが、その後の関東大震災や太平洋戦争によって殆どが焼失してしまいました。長八のお墓のある浄感寺や松崎町にある「伊豆の長八美術館」には、多くの作品が残され、公開されています。